

主な方法について」(共立女子短期大学文科紀要第二十五号、昭和五十六年)がある。

〔附記〕 本稿は、昭和五十七年十二月四日の木簡学会における特別研究発表「古事記の用字法から見た平城宮木簡の漢字用法」における原稿に基き、成稿したものである。その骨子は「平城宮木簡の漢字用法と古事記の用字法」(『石井庄司博士 喜寿記念論集 上代文学考究』昭和五十三年五月)に依り、その後に出土した木簡や「古事記音訓表」(文学第四十七巻八号、昭和五十四年八月)及び日本思想大系本古事記(昭和五十七年二月)の成果を取込み、構成を改めたものである。本稿の第二節は、本年五十八年八月発行の訓点語と訓点資料第六十九輯所載の小谷博泰氏「藤原宮木簡の用字および表記について」の「万葉仮名表記と文字能力」の所説と関連し、方向の同じことを喜ぶものであるが、氏が昭和五十三年の拙稿に言及されていないことを断らねばならない。

### 法隆寺百萬塔の墨書銘

法隆寺では、『昭和資財帳』作成のための調査の一環として、同寺に伝わった四万余基におよぶ百萬塔の調査を進めている。称徳天皇の願により宝亀元年(七七〇)に完成した百萬塔には、すでに平子鐸嶺『百萬小塔肆攷』などによってその底面等に当時の墨書銘がみえることが知られている。今回の調査では赤外線テレビを活用して一点一点墨書銘の釈読が行われているが、この程その調査の新成果の一部が「法隆寺昭和資財帳調査秘宝展」として特別展観された(一九八三年一〇月二日～一二月六日)。そしてその展観図録として刊行された『特別展観 法隆寺昭和資財帳調査秘宝展図録1』(法隆寺発行、八〇〇円)の中には「百萬塔調査の現状報告」が収められている。その中には「右三年六月十二日/石上足人」「三年三月廿六日丈マ造伊波」「左三年四月十日淨足」「左景雲元年十一月一日八千万」など、釈文の一部が紹介されるとともに、氏姓まで確認できた工人名も掲げられている。新発見の奈良時代の人名がふくまれており、さらに銘文全体の検討を通じて百萬塔作成の工程や工人組織の解明が期待され、注目される。なお同時に「百萬塔の調査から」の調査報告を収めた『伊可留我』(法隆寺昭和資財帳調査概報1、小学館発行、一〇〇〇円)も刊行された。